



女子大生の先輩

～四泊五日の淫惑旅行～

伊吹泰郎

挿絵／猫丸

立ち読み版



Contents

目次

序章	4
第一章	先輩の秘密
第二章	山小屋で
第三章	可愛いワガママ
第四章	祭りの夜に
第五章	お化けの正体
終章	279

登場人物

Characters

小野寺 一也

(おのでら かずや)

小柄で細身な十九歳の大学一年生。真面目で一途。くせっ毛や年下に見られがちな外見にコンプレックスを抱いている。サークルの先輩である琴美に思いを寄せている。

里崎 琴美

(さとざき ことみ)

一也と同じ創作系サークルに所属する二十歳の女子大生。巨乳で背が高く、軽く茶色に染めたストレートの長髪に切れ長の目をした美人。明るく快活な性格で人気者。

里崎 春乃

(さとざき はるの)

琴美の姉。歳は二十代後半だが若々しい。実家である初茅神社を継いでいる。

里崎 尚生

(さとざき ひさお)

春乃の夫。里崎家へ婿に入った三十五歳の元大学講師。真面目で温厚な性格。

第二章 山小屋で

「今日もよろしくね？」

「……はいっ」

他のメンバーが帰った後の、サークル『なんでも』の部室内。

一也は、琴美と正面から向き合っていた。

彼が先輩の秘密を知ってから、一週間が経過している。

初茅市への出発はいよいよ明日で、予定は四泊五日。その間ずっと、琴美の実家へ泊めてもらうことになっている。

加えて、二人が大学で顔を合わせる日は、欠かさずやることが出来ていた。

「……………」

まず、琴美はおもむろに一也の手を握る。その瞬間から、若々しい張りや温かみが、少年の皮膚に浸透してきた。

少しでも男へ慣れられるようにと、琴美の頼みで日課となった、この行為。多少の効き目はあったようで、表面上、彼女の硬さは大分抜けていた。

一也の方も、ともすれば手コキを思い出しそうになるものの、初日ほどには、しゃちほこばらずに済んでいる。

(里崎先輩は……僕をどう思ってるんだろう?)

そう考えるゆとりまで生まれていた。

時折『妄想』してしまうのだ。自分は、先輩から特に好かれているのかもしれない、と。

しかし、現実には甘くない。

真相は、弟分も同然の子供っぽい自分が、他の男子より親しみやすいというだけなのだろう。

少なくとも、根拠のない自惚れは戒めるべきだ。手を見下ろす琴美の目つきが、やけに安らいで見えるのも、きっと何かの勘違い。

それに自分からアプローチする気もなかった。このタイミングで交際を申し込むなんて、見返りを求めるみたいで嫌だ。大体、先輩を困らせたなら、リハビリめいた積み重ねが、水の泡になるかもしれない。

手コキだって、女子寮内での一回のみで終わっていた。

琴美はきつちり十数えてから手を離し、いつも通りのはにかみ笑いを見せる。

「うん……大丈夫みたい」

次いで、後輩の後ろへ回り込む。

「っ！」

一也は目をつぶって、踏ん張った。

こっちの接触については、まだ冷静でいられない。

息んだ直後、グラマラスな肢体が、倒れ込むように密着だ。

(う、ううう……！)

胸が高鳴り、体温が上がる。額にも腋の下にも、汗が浮き上がってきてしまう。

琴美の方にも大きな進展はなく、毎回、鼓動が太鼓を連打するようなハイペースとなっていた。

四秒、五秒、六秒――。

二つの心臓のリズムは、相乗効果でどこまでも激しさを増し、一也を翻弄する。このバイブレーションが、あらぬ『妄想』の元凶かもしれない。

しかし、十秒間は粘らなければならなかった。

唯一の救いは、部室で完全に勃つのを避けられていることだ。巨根の元気を減らすため、夜毎のオナニー数回は欠かせないが、それも里崎先輩だけは決してオカズにし

ない。

八秒、九秒——十秒。

「……ふうっ」

今回も耐え抜いた。

力を抜く少年の前へ、琴美が赤面しながら、戻ってくる。

「い、いつもありがとね、小野寺君……」

「どういたしましてっ」

呼吸を整えて、応じる一也。受け答えの際、彼は気恥ずかしさを堪え、琴美の顔を見るようにしていた。これも彼女からのリクエストだ。

琴美も上気したままだが、少年の視線を受け止められている。むしろ、強がり混じりのからかい口調で、目元を細めた。

「ふふっ、明日は午前七時の新幹線よ？ 寝坊しないでね？」

「もちろんですっ。任せてくださいっ」

返事と共に、自信も膨らむ。

手際も要領も悪い自分だが、先輩への敬意なら誰にも負けない。だからこそ、協力者でいられる。

誠実さこそ、自分の取り柄だ。

この夜。

一也は夢を見た。

——一也君……我慢しなくていいのよ？ あたしはもうすっかり慣れたんだから。

——ふふっ、エッチなお礼……いいっぱいしなくちゃね？

——さ、里崎先輩！

ハッと目を覚ませば、視界に入る天井はまだ暗かった。

五時半になったぐらい、だろうか。

(うう……。で……。出かける当日になんて夢を……)

細かい内容は思い出せないものの、誘われるがまま、琴美の裸身へキスしまくった
ような気が——、

(つて、思い出すなっ、僕！)

最低だ。よりによって旅立ちの日に。

しかも、枕元の目覚まし時計を見ようとすれば、

「あ」

パンツの中で粘つく感触があった。

一層、情けない。夢の中の先輩に飛びかかりながら、彼は夢精していたのだ。

新幹線で西へ数時間。さらにローカル線へ乗り換えて、三十分以上。

それほど長く電車に揺られながら、一也は明け方の風呂場で下着を洗いつつ感じた後ろめたさを、未だ打ち消せなかった。

夢と現実の違いははずだ。しかし、ああいう誘惑こそ、自分が真に望んでいたものように思えてしまう。

事実、琴美の顔を見ると（エッチなお礼、いっぱいしなくちゃね？）甘い呼びかけが脳内で蘇り、ペニスにはムズつきながら、半勃ちとなる。息も荒くなってしまう。今はガタンゴトンと揺れる座席のおかげで、どうにか隠せているだけだ。

仕方なく、彼は目を窓の外へ向け続けていた。

（僕は先輩の力になりたかったただけのはずなのに……違うっていうの……？）

身体の芯で息づくのは、紛れもなく、泥沼じみた性感。しかも、ずっと目を背けてきたことを詰るように、執拗だ。

出発前夜の特別感が淫夢を呼び、欲望まで活発にしたのかもしれない。ともあれ自

身の暗い面を、旅行当日に直視せねばならない困惑は大きかった。

今日の琴美の装いは、上が長袖シャツと薄いカーディガン。下は脚のラインが映えるジーンズだ。肌の露出が少なくて、まだ助かった。

気持ちを盛り上げるためなのか、彼女はいつも以上に陽気な声で話しかけてくる。

「……あ、そうだわ。例のお姫様と若武者って、今は初茅神社に祀られてるの。通称、ひめがみさま姫神様、とらがみさま虎神様ってね。だから、地元でお化けなんて呼ぶと怒られちゃうかも」

「……はあ」

十月中旬の今は、ちょうど紅葉シーズンへ入ったところ。山間部を走っていると、左右から迫る斜面の木々が色鮮やかだ。

「悲恋っぽい言い伝えがあるからかな、二人合わせて、縁結びの神様としても知られるのよ。結構、ご利益あるんですって。お守りをサークルのみんなへのお土産にしたら、喜ばれるかもねっ」

「はあ」

初茅市周辺の山は、どれも低めだが、幾重にも重なっていて、奥行きがある。しかも窓から見える範囲には、歩道も車道も通っていない。

赤、黄、オレンジ。そこに杉の緑も混じって、重なる色合いは眩しいぐらいだった。

昨日までなら、一也も感動しただろう。しかし、今は――。

「そういえば、来月の発表会に出す作品の進みはどう？」

「はあ……」

この態度の不自然さに、とうとう琴美も気付いたらしい。

「……小野寺君、乗り物酔い？」

「いえっ、あの、ちょっと緊張してて……これから五日間も、先輩の実家へお邪魔するわけですし……」

風景を見ながら、硬い声を返す。

なお、祭りは三日目の昼から夜が本番だ。

「……ふうん？ そんな構えなくてもいいのに……」

琴美はそれ以上、聞いてこなかったが――多分、納得もしていないだろう。

一也と琴美が降りた南初茅駅の周囲は、いかにも住宅街の入り口といった雰囲気だった。古い建物が多いものの、さつきまで線路沿いに見ていた風景と趣が大分違う。見慣れたコンビニの看板もあった。

市町村合併を繰り返してきたという話だし、地域ごとに性格の違いが大きいようだ。

「あ、いたいた」

不意に琴美が、道路の向こうへ手を振った。

見れば、一台のセダンが停車中で、傍らに持ち主らしき長身の男性も立っていた。

「あの人がお姉ちゃんの日那さん、尚生ひさおさんよ」

琴美は軽く説明すると、キャスター付きのカートを引きずり、男性——尚生の方へ歩きたした。一也も自分のバッグを肩に下げて、彼女の後を追う。

琴美の姉の里崎春乃はるのが、七年前に結婚していることは、電車の中で聞かされていた。尚生は今年三十五歳で、かつて都内の大学の講師だったそうだ。それが民俗学のフイルドワーク中、春乃と出会って恋に落ち、宮司の資格を得て、里崎家へ婿入りした。

琴美が高校進学を機に家を出たのは、血縁のない男性と一つ屋根の下で暮らすプレッシャーもあったらしい。

近づいてみれば、尚生は研究者らしさを残す知的な男性だった。額へ自然に垂らした前髪が、実年齢よりも若い雰囲気醸し出す。

「久しぶりだね、琴美ちゃん。それからはじめまして、小野寺君。僕は里崎尚生です」
穏やかな笑顔でお辞儀され、一也も慌てて頭を下げた。

「は、はじめまして。小野寺一也ですっ」

「小野寺君のことは、琴美ちゃんから聞いていますよ。大学のサークルで、仲良くしてくれているそうだね」

ところどころで、ですます調になるのも、講師時代の名残かもしれない。

そこへ琴美が口を挟む。

「ほらほら、尚生さん。挨拶の続きは車の中でも出来るでしょ？ 小野寺君だって、

重い荷物を担いでいるんだから」

「しまった。気が付かなくてごめんよ」

尚生が後部のトランクを開けてくれたので、一也と琴美は持ってきた荷物を押し込んだ。

「じゃ、行きましょ」

続けて開けてもらった後部座席へ、身を滑り込ませる琴美。

こんな気安いやり取りを見ていると、男が苦手なんて思えない。実際、尚生と春乃には、全くバレていないのだそう。暗闇恐怖症の方も、薄々気付かれている程度。

『新婚ほやほやの二人へ水を差すわけには、いかなかったでしょ？』

とは琴美の弁。

一也の紹介も、『地方の祭りや言い伝えに興味がある大学生』としておいたという。だが、この強い自制心のため、琴美は悩みを長く一人で抱える羽目になったのかもしれない。そう思うと、さすがに性欲以上に、胸の痛みを覚える一也だった。

最初に思った通り、住宅地の先で、初茅市の風景は一変した。畑が広がり、その向こうを細い川が走り、長閑のどかな農村といった感じ。

その先に、木々の密集する坂——というより、ちよつとした山の斜面が見える。目指す初茅神社は、本格的に農地の方へ抜ける手前にあつた。

境内はかなり広いようで、古めかしい鳥居の先に、石畳の道が真っ直ぐ伸びている。ここで車から降りるのかと思つてみると、車は鳥居の前を素通りし、神社の裏手へ回り込んだ。そちらに建つていたのは、トラックでも入れそうな、背の高い瓦ぶきの門だ。

「車で敷地に入れるんですね……」

「うん、でないと色々不便だからね。表はあくまで、神様と参拝の人の道だよ」
「な……なるほど……」

祭りの勉強に来た学生と紹介されている以上、いい加減な質問は連発できない。

(ボロが出ないように注意しないと……)

持ち前の悪癖で、あれこれ考え込みそうになっていた一也は、尚生の声で現実へと引き戻された。

「小野寺君、到着ですよ？」

「あ」

見回してみれば、車はとつくに車庫で停まっていた。

車庫を出るとすぐ、社殿と別に、住家の玄関があった。造りは厳めしい屋敷風で、素人の一也が見ても立派だ。

その玄関へ入って、「ただいま」と尚生が奥へ呼びかけると、一人の女性が板敷の廊下の奥から姿を見せた。

「お姉ちゃんよ」

琴美が一也に耳打ちしてくる。

「は、はじめまして、小野寺一也です」

一歩踏み出し、大きくお辞儀する少年。途端にバッグの重みで、よろけてしまう。

「はじめまして、そしてようこそ。琴美の姉の里崎春乃です」

春乃の方も、深々と頭を下げていた。しかしピシリと折り目正しい身のこなしは、一也の見苦しい挨拶と全く別物である。

静かに上げられたその顔立ちを見るや、一也は驚かされた。

琴美とよく似ている。それに、とても若々しい。もう三十近いはずなのに、二十代前半としか見えなかった。

ただ、妹よりは細い身体付きだ。

雰囲気も異なっていて、琴美が髪を茶色く染めて、大学の空気とも馴染んでいるのに対し、清楚な春乃は、静かな世界こそ似合いそう。着ているものこそ洋服だが、長い黒髪、ピンと伸びた背筋、涼やかな瞳——顔立ちや身のこなしは、純和風である。

琴美が苦手と言った気持ちも、少し分かるかもしれない。性別問わずに相手を魅了しそうだが、長く一つ屋根の下に居たら、引け目を抱いてしまうかも——。

などと勝手に思っていたら、春乃が一也へ向けて微笑んだ。

「ゆっくり勉強していつてくさいね。琴美ったら、東京まで行ったのに、今まで全然浮いた話がなかったんですよ？ 急に男の子を連れてきたいなんて言いだから、私、驚いてしまいました」

いっぺんに物腰が優しくなる。完璧すぎる美人というのは、一也の早合点らしい。

むしろ、

「お姉ちゃんっ、そういう話はいいからっ。早く小野寺君を部屋へ案内してあげないとでしょっ？」

「あら、そうだったわね。ふふっ、小野寺さん、こちらへどうぞ」

琴美が頬を染め、春乃は少しからかうようで、といった違いはあるが、さつき駅前でも見たようなやり取りだ。

琴美が持つ距離感とは、他人だと分かりづらい、身内の微妙な問題なのかもしれない。

一也が用意してもらったのは、本宅と渡り廊下で繋がれた離れだ。小ぶりの平屋で、中には和室が二つある。

和室の一つには床の間も付き、今は掛け軸一輪挿しが飾られていた。壁には能で使うしやうじやう狸々とはんじや般若の面も掛けられており、総じて本宅と同じく、歴史の重みを感じられる。一大学生が泊めてもらうには、立派すぎる建物だ。

小野寺君も荷物の整理があるでしょうから——と、里崎家の人達は、ひとまず本宅の方へ戻っていた。

が、バッグに入っているのは、着替えと、小説を書き進めておくための筆記具、後は使うかどうか分からない細々した雑貨だけだ。急いであることなど、特になかった。

場違いな気持ちを抱きつつ、一也がぼんやり室内を見回していると、琴美が一人だけやってきた。

「あ……先輩……」

静かな場所では対一になると、また明け方の淫夢を思い出してしまふ。

ここなら大声を出しても、きっと本宅までは届かず——いやいや。

(どうして夢の再現を期待してるのさ!!)

能面を調べるフリをして、琴美に背を向ける一也。

「どう、小野寺君？ 何か不便そうなところとか、ない？」

「だ、大丈夫です……っ」

この菌切れの悪さで、琴美も首を傾げた。

「……もしかして、まだ緊張してる？」

「は、いえ、はいっ、ちよつとだけっ。……ちよつとですから、せ、先輩は気にしないでくださいっ。それより、何かあったんですかっ？」

話題を変えようとしたものの、思った以上につっけんどんな口調となってしまうた。「近所の案内をしようと思つて来たんだけど……あの、出かけられそう？」

「もちろん行きますですよっ!!」

開けたところへ出た方が、まだ自然に振る舞えそうだ。

離れを出た一也は、まず神社の表側へ連れて行かれた。鳥居脇の水舎で手を流した後、境内へと入る。

初茅神社の敷地は、外から見た以上に奥行きがあつた。

長い道を辿つた先にある拝殿も、文化財に指定されそうなほど、荘厳だ。千木を乗せて端を反らす入母屋造りの屋根、黒ずんだ木の壁や柱——。建物の外壁を取り巻く通路と、その欄干も、重厚さを強めていた。

少し離れたところには、外側に向かって開かれた神楽殿があり、こつちも相当に歴史がありそう。

少年は修学旅行や初詣の時と、全く違う気分させられた。淫夢なんて俗っぽい悩みを抱きながら立ち入つたのが、ひどく申し訳ないような——。

「り、立派なお社ですな……っ」

「ありがたい。遠くから見に来てくれる人も、多いみたいなの。管理する側としては、維持とか大変なんだけどね」

拜殿の前に並んで立つた一也と琴美は、賽銭箱に五十円ずつ投げ入れた。垂れている縄を引いて、ガランガランと鈴を鳴らしたら、作法に乗っ取り、二礼二拍一礼。

(でも、何をお祈りすればいいんだろう?)

最大の願いは、琴美がトラウマ的な色々を乗り越えられることだ。しかし、それらの原因は、神として祀られている姫と若武者を、見てしまったことだという。

(じゃあ……里崎先輩が、もうこの神様を怖がらなくて済みますように……とか?)
それもまた、おかしな話。

結局、答えは出ないまま、それでも一也は真剣に祈った。

里崎家には自転車が二台あり、一也もそれを借りることになった。

彼としては、すぐに街の方へ行くものとはばかり思っていたが、琴美は反対の、車で来た時に見えた小山の方へ、道を曲がる。

「……まずはお姫様達が隠れた鍾乳洞の入り口、見ておいてほしいの」
硬くなりかけの声で言われたら、気を引き締めなければならぬ。

さあ——いよいよだ。

山の麓までは、自転車で十五分ほどかかった。

後は斜面に付いている石段を、徒歩で昇ることになる。上まで着いたら、紅葉する木々に囲まれつつ、さらに細道が奥まで伸びていた。

とはいえ、森は電車の中で見たものほど深くなく、日中に歩く分には、明かりなしでも不自由ない。

琴美は道の先へ進んでいき、一也も後に続く。

二人の間に会話はなかった。

(洞窟へ近づくのが辛いんだろうな……)

一也はさりげなく琴美の表情を確かめようとした。しかし間が悪く、彼女も物問いたげに、顔を向けてくる。

目と目がモロに合ってしまった、一也は慌てて顔を前へ戻した。

琴美の方からも、何も言っていない。

やがて、道の脇に四畳半ぐらいの山小屋が見えてきた。どんな目的で建てられたのか分からないが、今は放置されて、くすんだ窓から覗いてみても、中には家具や仕切りが全くない。

その小屋の前を通過して、しばらく歩いたところで、

「小野寺君……っ」

琴美が呼びかけてきた。思い切ったような、少し怒ったような、それでいて心細そうな声だった。

「今日はどうしちゃったの？ 緊張してるなんて、嘘なんですよ？ 朝、改札前であたしと合流してから、ずっと他人行儀じゃない……っ」

そこで口をつぐみかけた後、一段と訴えかけるような語調となる。

「あたし、君が嫌がることとか、しちゃった？ だったら、悪い所を教えてほしいっ。でない、と、謝りたいのに、きちんと謝れないもの！」

「う、あ……」

猛省させられる一也だ。

琴美が無口になったのは、鍾乳洞に近づいたからではなかった。いや、それもあるかもしれないが、何より自分の態度が原因だった。

（そうだ。先輩が苦手な祭りの時期に帰郷したのも、僕が付いているからなんだ……）

なのに、こんなザマで。琴美だって、安心して祭りに臨めるはずがない。

もう、正直に話すしかなかった。

「実は……僕……」

その時だ。

急に森が途切れて、横へ伸びる白っぽい岩壁が現れる。

岩壁の高さは四メートルほど。上の方にも森が広がっているらしいが、少年の意識は、眼前へのみ引きつけられる。

（ああ、これが……）

ついに到着。

日の光を浴びながら、問題の洞窟は高さ一メートル半ほどの口を、静かに開けていた――。

伝説と関係の深い場所だからか、洞窟の入り口上部には、太いしめ縄が張られている。

その先は真っ暗で、光が入ることを完全に拒んでいた。

もつと奥には、五年以上も琴美を悩ませ続けた、お化けが潜んでいて――。

（そんなはずないんだってば！）

異界への入り口めいた穴を見ていると、一也まで変な疑念に取りつかれそうだ。

「ここまでなら、今も昼に来られるの……。でも、中へは行けなくなっちゃった」

後輩への追及を後回しにして、琴美が弱々しい声を漏らした。

「前はここ、入れたんですか？」

「うん……。本当は立ち入り禁止なんだけどね。子供の頃のあたし、探検気分で潜り込んでたの。……。その時も、五メートル入るぐらいが限界だったけど……。洞窟の中は夏でも涼しくて、そう……。一人で考え事をするのにぴったりで……」

彼女の回想は、しりすぼみになって途切れた。

そこで一也も直前の決心を思い出す。

「里崎先輩……。今日はずつと、気分を悪くさせていてごめんなさい。僕、先輩を純粋に応援してるつもりでいました。寮でのことは一度きりの事故みたいなものだから、自分に言い聞かせて……。でも違ってたんです」

「どういふ……。こと？」

「今朝、先輩にいやらしいことをする夢を見て、起きた後で気付きました。僕はずつと前から、先輩を欲望まみれの目で見えていたんです。まるで弱みにつけ込もうとしてるみたいで……。もう先輩を助ける資格はないのかもって、この半日、心配だったんです」

言葉にすれば、夢をオーバーに捉えすぎたかもしれないと自覚できる。しかし、それでも純情少年には切実な問題なのだ。

「そ、それぐらい……っ」

琴美は呆気にとられつつも、かける言葉を探しているようだった。と、いきなり眉の端をキュッと上げる。目つきも鋭くなる。

一也と洞窟の入り口を見比べた後、彼女は一也の手をがっちり掴み、元来た道を引き返し始めた。

「来て！」

「……せ、先輩!？」

「いいからっ！ 何も聞かないで、ついてきて！」

振り返りもせず、言葉が矢のように放たれて。

ほとんど引きずられる形ながら、一也は従うしかなかった。

「……さっきの鍾乳洞って、伝説の舞台になった特別な場所でしょっ？ ここはね、あたしのお爺ちゃんが、その管理小屋として建てたのっ」

来る途中で見かけた山小屋の中へ一也を連れ込み、戸をきっちり閉め直した琴美は、

ようやく掴んでいた手も放した。

そして短い説明の後、挑むような眼差しをぶつけてくる。触れたら火傷しそうな気迫まで発散だ。

(すごく怒りだした!?)

男が苦手な琴美に、至近距離から睨まれるなんて初めてだった。果たして、どんな風に怒鳴られるのか――。

首を竦めたくなる一也の前で、琴美は声を張り上げた。

「ここなら誰にも見られないし、夢で見たこと、あたしにし放題よ！ 遠慮とかいらないから！」

「え……えええっ!?!」

今度は一也が唾然となる番だ。全く以て、意味が分からない。

思わず見つめ返すと、琴美の頬がみるみる赤らんでいく。

「あたしねっ、小野寺君が力を貸すって言うてくれた時、本気で嬉しかったのっ……。き、君が喜んでくれることなら……。あたしもやってあげたいし……。！ だからね、負い目なんて感じないで、胸を張っていいの！ 自信を持って、小野寺君！」

彼女は怒っているのではなかった。

自分だって吹っ切れていないのに、悩むこっちを見かねて、身体を張ろうとしてくれているのだ。それも、トラウマの源である鍾乳洞のすぐ傍で。

一也の血も、煽られたように熱く滾りだした。

里崎先輩は強い人だ。そして強いのに、脆い。

この先輩を、誰よりも近い位置で支え続けたいと——彼は改めて願った。

崇拜するのではなく。腫れ物へ触るように気遣うのでもなく。ごく当たり前な自然体で、助けたい。

確かにセックスへの欲求もある。でも、それはもっと大きな『欲望』の一部に過ぎない。

一也は自分から、琴美の両手を握りしめた。

「先輩……僕は先輩が思っている以上に欲深いです！ やらしいことだけじゃなく、もつともつと大胆なこともしたいんですっ……！」

「え？ な、何っ？ 何したいのっ？ あたし、とんでもないことされちゃうっ?!」

さすがの琴美も身構えかける。そこへ一也は思いの丈を吐き出した。

「僕っ、先輩に告白して、恋人になりたいんですっ！ 里崎先輩っ……僕はあなたに惹かれ続けてきました！ あなたが……あなたが大好きですっ！」

「いいっ!!」

落雷でやられたように、琴美が大きく身震いした。握られていた両手も震えだし、もしも一也に掴まれていなければ、ストン——と、腰を抜かしてしまいそう。

「ほ……本当に……? 小野寺君……っ、本当なのっ?」

「本当です、里崎先輩!」

「あ……ああ……し、信じられない……!」

琴美の目に大粒の涙が浮かぶ。それでいて四肢には力が戻り、一也の手を強く握り返してきた。

「もうっ、全部解決するまで、告白できないって思っていたのに! あたしも……あたしも小野寺君が好きよ! 一緒にいて温かい気持ちになれる君が好き! 苦手意識なんて乗り越えて、君と恋人らしいことをいっばいしたいから、あたしは頑張ろうって決めたの!」

「先輩……!」

一也はわななき、琴美の手を自分の胸に引き寄せた。

「きゃ……!?!」

驚きの声を上げながらも、琴美はよろめくように近寄ってくる。少年の胸板に受け

止められると、目を閉じ、心持ち顔も上向かせた。

ここまで分かりやすいサインなら、何を求められているか、一也にも分かる。彼にとっては、ファーストキスだ。それに多分——琴美の方も。

激情で弾む心臓が、さらに速まりだした。脳天にまで振動が届く。

それでも少年は、自分を奮い立たせた。

背の高さがほぼ同じだから、前進させるような格好で、顔を寄せていく。

琴美の唇は艶めかしく潤っていて、四肢が硬くなつて尚、表面の赤みが、微かな呼気と共に揺らめくようだ。

「っ……」

最後に目を閉じて、ぴったり触れ合つてみれば、初体験という感動に負けず劣らず、プルンとした瑞々しさが素敵だった。

花弁さながらのその一点に、生気が溢れている。圧されて凹みながらも、少年をなぞり返してくる。

「ん……う……」

一途な声色も愛おしさの要因だ。握られたままの手の指先は、軽く少年の胸へ触れてくる。

最低でも十秒は睦み合っていただろうか。一也は息苦しさを覚えて顔を離れた。

「あ」「ん……」

二人で臉を開けてしまい、一也は照れくささでのけ反りそうになった。逆に琴美は、少年の抱擁をかいぐらせた両手で、強くしがみついていた。唇に代わって、頬と頬とが擦れ合う。

「いっ!!」

ブラに包まれた特大の丸みが潰れる感触は、背中を受け止めるより、遥かにインパクトがあつた。

加えて腕も、肩も、腰周りも、活き活きしたしなやかさが魅惑的。折れてしまいそうなほど華奢なのに、羽根のように軽やかだ。

下腹部で押さえられた一也の股間は、問答無用で肥大化し始める。

恥ずかしいのはこれまでと同じだったが、琴美を押しつける気になれなかった。むしろ、いつまでも密着感を味わっていたい。

「く……うっ!」

一也は開き直って、自分からも琴美を抱き寄せた。肩へ顔を埋めるようにしながら、股間もひたむきに押し付ける。

男根はすでに伸びあがっていた。そこを二人にプレスされ、浅ましい脈動がより強まる。

抱き合いながら達してしまっても、気持ちいいのではないか、そんな想像が一也の脳裏をかすめた。

そこへ琴美のかすれ声。

「小野寺君は……どんな夢を見たの？」

「……詳しく覚えてないんです。でも、すごくエッチだったはずで……」

すると琴美は身体を引いて、茹だつたような顔で告げてきた。

「だつたら、今回もあたしにやらせて……！ あたし、寮で失敗したのを反省して、方法を調べてみたの。小野寺君が夢を思い出せないなら……それを試してみたいっ」

「はっ……はい！ お任せします、先輩っ！」

一也は頷いた。

先輩は無理なんかしていない。きっと大丈夫だ。気を遣いすぎたら、また悲しませてしまう。

思つた通り、琴美は真つ赤な顔を輝かせた。

「うん、頑張る！」

言いきつて、いそいそとカーディガンを脱ぐ彼女。続けてシャツのボタンを、下から順に外していった。とはいえ、指の動きが情動に追いつかないらしく、シャツを開ききるには、少々時間がかかりそう。

琴美の性格からいって、横から手出しされるより、自力でやりたがるだろう。

直感した一也は、自分もベルトを外し始めた。ベルトの次は、ズボンの前。さらに弾みを付けて、腰周りのゴムを千切らんばかりに、トランクスを脚の付け根まで下げた。

直後、根元へバネでも仕込まれているかの如く、ペニスは逞しく外へ躍り出る。竿の部分も硬くなり、亀頭を拳よろしく、天井へ突き上げた。せっかちなことに、膨らみきった亀頭の先端周りは、もう先走りですれ始めている。

そこで顔を上げれば、琴美もシャツの前を開き終わったところだ。いつになく積極的な少年の視線を受けて、一瞬だけ怯みかける先輩。だが目も口もきつく閉ざすと、彼女は見せつけるようにパッとシャツを全開にした。

二つ揃って現れたブラジャーのカップは、情熱的な赤色だった。上が半透明のレース地で、持ち主の初々しさと反対にセクシーなデザイン。しかも、ちよつとしたスイカなら入ってしまいかねないほど大きかった。

だが、琴美のバストは、そんなカップがぴったりボリリュームなのだ。一也が指を広げても、丸みを捕まえるのは難しそう。そしてズシッと重たそう。支えるカップとストラップが、心もとなく思えてしまう。

琴美は目を閉じたままデシャツを脱ぎ捨てると、上体を傾け、両手を後ろへやった。すぐにホックがプチンと外れ、ブラのカップも下へとずれる。仕上げに肩へかかるストラップから、片方ずつ腕が抜かれていった。

カーディガンとシャツを追いかけて、ついに真紅のブラジャーまでが下に落ち、これで琴美の上半身は丸裸。

「ね、小野寺君……私の身体って、変じゃない？ 胸とか……不格好じゃない？」
琴美がモジモジ、身体の前で両手を重ね合わせれば、バストは腕に挟まれ、盛大にたわんだ。

「変だなんて……すぐく……綺麗です……」

一也は答える間も、裸の上半身を凝視し続ける。

むき出しになり、胸の膨らみは一段と迫力を増していた。

重量感に満ちる上、肌は血の気を浮かせた桜色。ひたすら柔らかそうなのに、カップがなくなつて尚、自力で下端に三日月形の麗しい影を二つ作っている。

それらが圧されてピッチリ合わされれば、谷間にはもう、紙一枚入る隙さえない。

「んっ……ふふっ、小野寺君に褒めてもらっちゃった……」

うっとり喉を鳴らしながら、薄目を開ける琴美。まだ落ち着かなそうだが、同時に幸せそうで。

彼女にそんな表情をされたことが、一也は無性に誇らしくなってきた。

琴美の胸は先端までも美しい。乳輪はサーモンピンクで真円を描き、同色の乳首はポッチリ尖っている。外へ出た時、突起は重力へ逆らうように、ツンと上向きだった。それが乳肉を押しされることで、転がり落ちそうな格好になる。

「小野寺君は、パイズリって知ってる……?」

「し、知ってますよ! パイズリ!」

見た瞬間から魅了された巨乳。琴美はそこに怒張を挟もうとしてくれていたらしい。初心な琴美の選択としては、やけにマニアックで、自分の願望がテレパシーで伝わったみたいだ。

「あの……パイズリのやり方って、どう調べたんですか?」

一也は問うてみる。すると琴美は聞かれたことが不思議なように、

「え? それは……エッチなDVDを、レンタルで借りたりして……。あ、特別な言

葉遣いも色々覚えたんだからっ」

最後の付け足しだけは、ちよつと得意げ。道理でマニアックだった訳だ。

しかし、一也にとやかく言う気があるはずもない。

「よろしくお願ひします、先輩……!」

「うんっ」

琴美も両手を巨乳の下へやって谷間を広げながら、少年の前へ跪いた。

先輩がやりやすいようにと、一也は下半身を前へ出す。だが巨根の屹立ぶりは、彼の薄い腹へくっ付かんばかりで、捕まえるのは見るからに難しそうだった。

「や、やるからね……っ」

言つた琴美も動きを速めたものの、勢い余つて、乳首を後輩の脚の付け根へぶつけてしまう。

「んっ」「ふあっ!?!」

一也は汗が溜まりやすい薄皮をくすぐられた。琴美は敏感な突起を自ら潰した。各々、短く呻き声。

それでも琴美は諦めずに、歪んだ乳房を左右から寄せようとした。すると、乳首も少年の股間に引つかかつたまま、ズリズリとスライドし始める。

「ふくつ、や……うっ!? あたし……胸がっ……」

どうにかペニスを挟むことには成功したものの、琴美は早々と息を乱しかけていた。一也も淫靡なおマケ付きで、急所を包围されたのだ。否応なしに官能神経をつま弾かれ、棒立ちのまま、動けなくなる。

「く、あ……先輩……っ」

巨乳の柔軟さは底なしだった。たおやかな十指で圧されるままに変形し、竿へもエラへも、隙間なく形を合わせてくる。それでいて、手や異物を押し返したがるような弾力があり、体熱を浮かせながら、怒張をムニユツムニユツと蒸していた。

逸物の側も負けじと反って、切っ先周りだけは外へ出している。だが、我慢汁をこぼす姿は、いかにも沈没しかけているようだった。

そのテラつく鈴口の真上で、琴美がモゴモゴと唇を動かし始めた。

「ん……むっ……ふううん……っ」

一也だって、パイザリの映像ぐらい見たことがある。なのに、新鮮な感触に飲み込まれ、今は全然、先を読めない。

たじろぐ後輩の前で、琴美は唇を薄く開いて——トロオリ。舌先で泡立たせて粘度を付与した唾液を、はしたなく鈴口へ垂らしてきた。

「ふあっ!!」

驚きと、ヌルつく生暖かさが、亀頭へねっとり纏わりつく。粘膜の内まで浸透してきそうだ。

一也が唸る間に、唾液がまた落とされた。二発目以降は、エラと巨乳の境目狙いで、ポタリ、ポタリ、ポタリ。少年にとっては過ぎた痺れを、亀頭の丸みで連発させる。

「は……!! あ、あっ!!」

「ん……よし……っ」と

男性器に一層の湿り気を持たせた琴美は、一也が対応できないうちから、並ぶ乳肉を半センチほど持ち上げた。具合を確かめるように揺すりつつ、亀頭を下側から解しだす。

とはいえ、エラの裏はまだ濡れていなかった。摩擦の痛烈さは、唾液が当たった一瞬を軽く追い越してしまふ。

「あっ! つあっ!! うあうっ!!」

一也は神経を直接揉まれたした心地だ。脚が震えて、もはやその場に立ち続けるのすら難しい。

それでも気張っていると、琴美の力に緩急が付き始める。ギュッと強まった時には、

乳房を縦長にひしゃげさせるほどの圧迫で、亀頭も手加減なく押さえつけ。

「ん、ふ……すぐく元気……っ」

バストが火照ってくるせいで、肉幹回りの温度も上がり続けた。

先輩が特に感じるのは、乳首のようだ。そして彼女が奉仕するほど、突起はグリグリと少年の股座へ引っかかる。

「小野寺君つてば、全部熱くなつてて……ん、変な風に胸へ擦れてくる、の……っ」
「ち、違いますよ……熱いのは……先輩の方です……！」

しかし、一也は言い返しつつ、次第に疼きが和らいでくることに気付く。

バストに浮いてきた汗が、新たな潤滑油の役割を果たしたのだ。おかげで強すぎたカリ首への摩擦も、快感と言い切れる域にまで降りてきた。

「あ、あ……!! 今の……そこっ、気持ちいいです……!!」

この一言が、朦朧となりかけた琴美に活を入れたらしい。

「うん……!! だったらっ、こういうのはっ!!」

急に声をはっきりさせた彼女は、バストを潰したまま、下から上へ走らせる。それも今までと段違いの猛スピードで。

刺激に馴染んだばかりのエラも、逆撫でされて裏返りかけた。そればかりか、ペニ



スが収穫される大根よろしく、丸ごと引っこ抜かれてしまいそう。

「ふ、ぎいいっ!？」

獯猛な官能の渦に、一也は発情した雄猫のような声を上げた。

さらに琴美の手が移ったことで、重みのかかる部分も変わる。

さっきまでは竿が主に締められていたのだが、新たに亀頭を絞られ始める。ずっと

外気に当たっていた鈴口まで、完全に閉じ込められてしまった。

琴美はその高さで手を固定すると、改めて赤らんだ乳房もろとも、亀頭をムニムニ

こねくり始める。

一秒たりとも同じ形に留まらないバスト。見下ろしていると、中で牡肉までが変形

してきそうに思える一也だ。

「ど、どう……これっ?」

過激なことをやっておきながら、聞いてくる口調は照れくさそうで。

「っ……気持ちいいです……うっ!」

「ふふっ……だ、大成功……ね!」

嬉しげに笑う顔にも、無防備さと淫らな色が同居していた。

「小野寺君……もっともっと気持ち良くなっ……あたしの覚えたことっ、全部し

てあげるから……!!」

言い終える前に、バストは急降下する。亀頭と竿の皮を引っ張ることで、てっぺんの鈴口も拡張させていく。そして最後にずっしり重たく、竿の根元と衝突だ。

「ふぁあっ!!」

少女のように喘いでしまう一也。

出てきた亀頭も、先走りと汗でヌラついており、本当に快楽で溶ける前触れのような。

だが、一也は乳圧へ溺れそうになりながら、腿へぶつかる乳首の尖り具合も、気になりだした。ペニスの愉悦と比べればずっと小さいはずなのに、心へ引っかかってくる感触なのだ。

そこが性感帯になることぐらい、分かっているし――。

弄れば、先輩にお返しできるかも。

些細な思いつきだが、一也は手を浮かせていた。

互いに汗を擦り合わせる巨乳と腿の間。そこへ不器用に二本の人差し指を突っ込み、ここだ、と見当をつけて捻じ曲げる。

途端にしこる突起が、指の腹へぶつかる。乳首にはゴムを凝縮したような弾力があ

つて、巻き取りやすかった。

これが、先輩の、乳首——！

脚で受動的に触れるのとは違う感慨が起こり、悩ましさも指先から這い登ってきた。
「ん、くっ！」

二の腕にまで鳥肌が立ちそうだ。

しかも琴美の反応は、彼の期待以上に派手だった。

「ひうっ!! やっ、やだっ!!」

上げかけていた乳房を急停止。可愛い悲鳴を山小屋の中に響かせてしまう。

「乳首が……痺れ……えっ!! ああんっ! 何これっ! お、おかしいのお!!」

支離滅裂に叫ぶや、指から逃れたがるように、上半身を揺すりだす彼女。

抱擁されたままの牡肉も、丸ごと振り回されてしまった。伸びきった神経が振れる。
溜まりかけていた精液も、傾くコップの中身よろしく、ぶちまけられそうだ。

「くあっ!! ごめっ、ごめんなさいいっ!!」

一也は情けなく叫び、指を引っ込めた。

琴美も一緒に手を止めて、運動したばかりのように肩を上下させている。

「あの、あたしこそ……ごめんね? 乳首が急にビリッて来て、ビックリしちゃって

……」

一也の臍の辺りを見つつ、弁解するような口ぶりだ。

しかし、その『ビリッ』こそ、一也が望む感覚かもしれない。

「それって……ちよつとは気持ち良かったってこと……じゃないでしょうか？」

「っ……！ よく分かんない……っ。は、初めての痺れ方なんだから……っ」

少なくとも、痛かったようには見えない。

そうなると突き詰めてみたくなる。

「里崎先輩……もつと僕にさせてくれませんか？ 苦しいようなら、すぐにやめま

すから……！」

「えっ……」

押し強さに驚いたか、一也を見返そうとする琴美。途中で羞恥が勝ったように目を伏せてしまうが、何秒か迷った末――、

「あたしがおかしな声出しちゃつても……呆れないでね？」

遠回しな了承をしてくれた。

「はいっ！」

言うや、一也は乳房の上へ、左右の親指まで突っ込んだ。人差し指と連動させて、

いきなり二つの乳首を摘み上げ。

「んひっ?!」「ふぐっ?!」

堪らず、琴美がのけ反り、ペニスもグイッと引き倒されかけた。

それでも一也は、捻られる愉悅に耐えて、指を操る。右へも左へも、しつこく乳首を転がした。クリクリ、クリクリ、クリクリ、クリクリクリッ!

「ん……くっ、ふ、むうううう! ひっ、はっ?! ふううんっ?!」

琴美はパイズリを休み、唇を噛みしめながら、疼きの正体を見極めようとしていた。しかし、気持ちいを胸の先へ集中させれば、押し寄せる性感が強まってしまう。ついには困惑の喘ぎがまろび出た。

「っ……ひぁあうっ! やっ、やっ……!! この感じっ、どんどん熱くなっちゃうっ……!!」

いやいやをするように頭を振りだす彼女。乱れた茶色い髪が、窓から入る光を反射して躍るのが、やけにエロティックだ。

少年も調子づく一方。

どんだん。このまま、どんだん。先輩にも悦んでほしい!

彼は思いつくまま、突起の上下から力を加えてみた。ゴム球じみた突起を、押し潰

さんばかりに苛めだす。

「いひ……っ!!」

琴美が四肢を竦ませた一瞬のうちに、きつめの摘み方のまま、グニツと再び半回転。短い爪の先で引っ掻いてみたりもする。

一也らしからぬやりたい放題に、琴美は混乱しながら、浮かせた下半身まで揺らがせ始めた。ジーンズで包まれたヒップがくねくね踊り、括れたウエストも振れだす。少年の視点から見える部分は僅かだが、布地がフィットしている分、スカートを穿いている以上に、腰の振りは扇情的かもしれない。

「ふあっ！ どうしてっ!! この感じっ、んやっ、こんなもの……まずいつてばあ!!」

今や、乳首が性感を開発するダイヤルのようだった。

軽く回せば、吐息が切れ切れに揺らぐ。強く回せば、

「あひいっ!!」

嬌声がにわかに音量アップ。

やがて、官能の熱に浮かされた琴美は、反撃するようにパイズリを再開させた。

さっきのように具合を確かめながらではない。不規則ながらも長いストロークで、

巨乳をユツサユツサとピストンだ。

「ふあっ！ やうんっ！ ひううんっ！」

乳首を囚われたままだから、バストを上げた時も、下げた時も、殊更に引つ張られてしまう。なのに、彼女は鳴きながら、牡肉を可愛がろうとする。まるで一也にかしずくことが、自我を保つよりどころとなつてしまつたようだった。

「胸っ……あたしの胸で……感じてえっ……！ ああんっ、小野寺っ、くううんっ！」
「くあっ!! せ、先輩いいっ！」

がむしやらかなやり口は、一也へも痛烈な喜びを流し込んだ。

カリの裏が小突かれ、亀頭が解され、竿も長く扱かれる。さらに休む間もなく、またカリの裏側を持ち上げられて——どう転んでも、快感は待つた無しだ。

エラの外周に至つては、絶えず揉まれ通しだった。神経を走る電気信号が限度を越して、今にも焼き付いてしまいそう。

乳首弄りの間に、我慢汁は広範囲へまぶされていた。さらに新しい液も分泌中で、乳肉で擦り取られながらも、トロトロこぼれる。亀頭に乾く暇など、微塵もない。

「せ、先ぱっ……つつ、それっ、強すぎますよおっ!!」

因果応報。

防戦に回らされた一也の呻き声は、琴美に聞き入れてもらえなかった。

「はっ、はっ、はふっ、はっ、はああうっ！」

反復運動さながらのペースで、酩酊状態へ陥っている琴美。淫靡にうねる裸の肩の上を、汗の珠が滑り落ちていく。

「はっ、ひ、ひううんっ！ 今日もイッて……っ！ 一也君っ……うああうっ！ 一也くううんっ！」

懇願のような、うわ言のような、ビブラートのかかる喘ぎ声だ。感極まってきたからなのか、または名前呼びが混じり始めた。

一也の肉竿の付け根へも、精液が集まりだしている。身体の内から灼熱感を強め、尿道を狭めても、もう押し戻すことは難しい。

だが射精すれば、濁流の爆発力は、女子寮の時と変わらないだろう。また琴美を汚してしまふことになる。

やり方を覚えてきたとは言われたものの、思い出すのは顔射された刹那の錯乱ぶりだ。

——やだっ、やっ！ どうしよっ、おちんちん壊れちゃったのっ!?! ——
汗だくの美貌や茶髪にスペルマがへばりつき、彼女は泣きじゃくるようだ。

「うっ！ ううっ！」

罪悪感があるはずなのに、何故か肉欲も倍増してしまふ。

精液も股間の脈動と合わせて弾み、グツグツ煮え立つようだった。

「先輩っ……本当にイッていいんですかっ!! またっ、精液っ、先輩にかけて……いいの!!」

唸るように尋ねれば、ちょうど巨乳も下へ向かって一直線だ。

「はううっ!!」

突き飛ばすような疼きで少年を硬直させるだけでは飽き足らず、柔肉は頷く動きと合わせて、小刻みに上下した。海綿体越しに何度も発破をかけてくる。

「うんっ！ 出してっ！ あたしならもうっ平気っ！ どう飛ぶか分かったからっ……

……このままっ、受け止めるからああっ！」

言ったら再び、大きな律動だ。昇る動きは、精液を引きずり上げるよう。下がれば、ザーメンの溜まり場へ、並はずれた重みをかけてくる。

了解をもらえて、一也の迷いも粉碎された。

「は、いっ！ イキますっ！ 僕っ……もうっ！」

「うんっ、イッて！ ビュクビュクっ……飛ばしてえええっ！」

琴美は素潜りするように、首をカクツと下へ向けた。舌を突き出し、我慢汁が垂れ流しの鈴口へ押し付けてきた。

「んぎっ!!」

ここで愉悅を追加されるなど、一也も思っていなかった。琴美の舌は先端がすぼめられ、精液の出口を割るようにつかってくる。痛み混じりの肉悦には、スペルマもグッと勢いづいた。

亀頭が何度も巨乳へ沈むから、突かれるのは一瞬のみだ。しかし、すぐさま浮いてきて、その度、粘膜同士の正面衝突。刺激は目まぐるしく破裂する。

「んぶっ、あ、ぷ！　ううむっ、あぶぶ！」

「うあっ！　あっ！　あっ！　つああっ!!」

琴美のくぐもった呻きと似たりズムで、一也も悲鳴を上げてしまった。

もう止まれない。イクしかない。精液に中ほどまで侵食されて、ペニスがパンクしそうだ。

「出るっ！　出ますっ！　僕、もうっ、イクうううっ!!」

そこへとどめを刺すように、怒涛の勢いで舌が降ってきた。グニツと鈴口を広げた。バストも肉幹の上をズズズツツと滑り落ちていく。

「んぶうううふっ!!」

「うあつ、あああつ!!」

仕上げの法悦の爆発力で、集結していた子種が押し上げられた。粘る汚濁は、残りの距離を一気に詰めて、雄々しく噴出していく。

その狭い出口の上では、琴美の舌が快感に震えていた。

ベチャッ、ベチャベチャッ。舌は赤い表面を白く染められながら、レール替わりとなつて、苦いはずのゲル状を口内にも迎え入れてしまう。

「んぐっ! ぶっ、ひううううっ!!」

琴美はエグ味を口腔へ刻まれながら、肩を強張らせていた。反射的に逃げかけるものの、寸前で踏みとどまり、逆にペニスを締めてくる。舌も裏筋へ押し付ける。

ザーメンを受け止めると約束したのを、意地でも守りたがるような奮戦ぶりだ。

おかげで少年の肉悦も和らがない。果てた瞬間に迎えた極上の悦楽を、延々と肉棒内にねじ入れられる。

「イクッ!! これじゃまたっ……イツちやいますよおおっ!!」

叫ぶ途中にも、ドクンッ。

竿に残った子種が、琴美目がけて飛び出していった――。

肉悦から解放されると、ようやく一也は座ることが出来た。とはいえ姿勢は、足を投げ出し、後ろ手をついた、だらしないもので。

「ふうっ、はあっ、はあっ……っつ、はああっ！」

十月半ばにもかかわらず、小屋の中が蒸し暑く感じられた。息苦しいし、汗もどんどん垂れてくる。

琴美の胸や自分の股間に絡む精液は、どうにか立っているうちに拭き取った。

ペニスの方はまだ元気だが、やや小さくなったところを、押し込むようにトランクスへ収め、ズボンも腰の高さまで戻してある。ただし、ファスナーとボタンは手つかずのままだ。

パイズリ中に膝立ちだった琴美はといえば、尻を下へ落として、正座と似た格好。放り出していたブラのカップを胸へかぶせ、片手で押さえていた。

「ん……ふっ……あ、ふ……ふううんっ……」

彼女も呼吸を乱しっぱなしで、腕をストラップへ通したり、ホックを留め直したりが、出来ないのかもしれない。

一也は天井を見上げ、琴美は俯き加減で。どっちも相手の顔を、ちゃんと見られな

い。

それでも一也がほんの少しだけ目をやれば、先輩は開いている方の手を口元にやり、
精液の味を反芻している様子だった。さらにブラを押さえる手で、さりげなく乳首を
撫でているような――。

(わわっ……!?)

一也は、おとなしくなりかけた股間が一気に復活しそうで、あたふたと天井を見た。
(落ち着け、落ち着け、落ち着け……っ)

――ギリギリセーフ。勃ちきる手前で食い止められる。
そこへ琴美が話しかけてきた。

「かず……ん、小野寺君……。本当はね、この後で町の案内もしたかったんだけど……」

「……明日に回しましょうか」

汗びっしょりだし、気持ちも高揚しているし。

「うん……そうしょ?」

琴美の方も、綺麗だった茶髪が、すっかり乱れていた。

こんな状態で、人前に出られるはずがない。

(じゃあ、今日は……)

一也は名残惜しさを感じながらも、腰を上げようとする。

「帰りましょうか、先輩」

だが、琴美の意見は違ったらしく、どこかソワソワ言ってきた。

「ま、まだ……ここにいない？ ここに入るのも久しぶりだし……っ」

「はい？」

この簡素な小屋へ、何やら思い入れがあるのだろうか――。

首を傾げる一也の鈍さに、琴美の方は真っ赤となった。

「だ、だからねっ……変な感じが、身体に広がっちゃって、まだ抜けないの……。服が当たってもドキドキしちゃうそうで……歩くのは大変っていうか……あのっ……」

「そっ……なんですかっ？」

一也はしゃっくりするように語尾を弾ませた。

「くっ……!？」

ペニスも即座に最大サイズへ戻ってしまう。今度は防ごうと試みる間さえなく、竿は痙攣しだし、裏筋もトランクスと擦れ合い、これまた、服が当たってドキドキだ。

「ん……う……っ」

下着を緩めるため、やむなくだらけた姿勢に戻る一也。

そのまま一分近くが経過したが――。

暑い。それに熱い。

性臭が籠もるこの小屋で、どれだけ待てば、自分達の性感は鎮まるだろう。

いや、ジツとしていても、高まるだけかもしれない。現に、些細なきっかけで、ペニスも屹立してしまう。

これ以上は、間が持たなかった。

今までの一也であれば、あたふた困るだけだっただろう。

だが、手コキに続いて、パイズリでも絶頂を迎え、彼も少しだけ凶太くなっていた。彼は股間への重みに耐えて、身を起こす。

「先輩……っ！ この小屋で、今っ、僕にもやらせてくれませんか？ パイズリのお礼………したいんです！」

欲望にも愛情にも、正直に。欲求を解消するためというより、恋人のはしたない姿を見たい。

反対に琴美は「えっ!？」と身を強張らせ、ブラを乳房へめり込ませてしまう。

「はうっ！」

乳肉の頂を凹ませながら、眉を色っぽくしかめる彼女。太腿もキュッと寄せて、いかにも付け根周りが切なそうだ。

「お……お礼って、どうやるの……?」

「それは……」

いきなり詰まりかけた。勢いで言ってみたものの、具体的なことなど考えていないのだ。

——どうやるのが良いだろう。何が先輩に悦ばれるだろう。

そこで唐突に閃いたのは、今朝の夢だった。詳しい内容こそ思い出せなくても、裸身にキスしまくったのは覚えている。自分も肉棒を舐めてもらおうと気持ち良いし——、「口でするのはどうですか!」

考えが纏まる前に、言葉が飛び出してしまった。しかし、却って決心できた。

「口で……って? え? あの?」

琴美が目を丸くしていても、取り消そうとは思わない。

「先輩のドキドキが残る場所、全部に僕がキスしますっ。全部、吸い出しちゃいますっ」

「あ……うう……そういうやり方が……?」

しばらく、琴美は四肢をモゾモゾさせていた。

だが。胸中でどう整理をつけたのか、やけに艶めかしい息を吐いた後、小さく頷いてくれる。

「……………うん……………」

そのまま、目を伏せ、巨乳からブラを下ろした。露わになったバストは表面が張りつめ、乳首も妖しく尖っている。

「……………一番ドキドキしてるのは……………胸かも……………。あ、でも、他の場所も……………色々……………」
よろめきながら立ち上がった琴美は、夢の中を彷徨うような手つきで、ジーンズに手かけた。そこでちよつとだけ声をはっきりさせて、

「ぬ……………脱ぐ間だけは……………あっち向いててくれる……………?」

「はいっ!」

意志が固まったとはいえ、一也にも羞恥心は残っていた。素早く目を閉じ、身体も横に向ける。

とはいええ、脱ぐ過程の音なら、耳へ飛び込んできた。特にファスナーの擦れは、聞き違いようがない。

(先輩が……………下まで脱ごうとしてる……………)

窓から覗かれれば丸見えの、こんな屋外みたいな場所で。自分の提案を聞き入れて

「ん…………う…………つ…………」

シャツの時以上に、琴美は手こずっていた。それでも足を浮かせて、靴を脱ぎ、ズボンの方もどうにか脱げたらしい。

そして、ついに待ち焦がれた瞬間が来た。

「…………い…………いいわよ、小野寺君…………」

「っ！」

気持ちがりすぎた一也は、簡単には目を開けられなかった。片手でセカセカと顔の上半分を擦って、ようやくく臉を上げられる。

「わ…………わ…………っ」

称賛の声すら、すぐには出せない。

本当に先輩は裸同然だ。ブラと揃いの赤いショーツ以外、もう何も着ていない。

左手で胸を、右手で股間を隠し、少しでも露出を抑えようとしている様に、却って一也は劣情を催してしまった。

先輩がズボンを愛用していたのは、男の視線が気になるからではなからうか。むき

出しとなってみれば、注目間違いなしの脚線美なのだ。長く、引き締まりつつも適度な肉付きで——太腿など、白く輝かんばかりに張りつめている。

「綺麗……です……」

喋れるようになって、一也は胸を見せられた時と似た感想がやつとだった。

見上げる彼には、先輩が目も口もきつく閉ざしているのが分かる。その追いつめられた表情が、少年のシンプルな言葉で、泣きそうになった。

可愛い。

だが、彼女は今にも膝が碎けそうで。

そこで一也も立ち上がり、心臓をバクバク言わせながら、先輩の肩に手をかけた。

「ひっ!!」

「あの……こっちへ……」

理性を総動員させて、近くの壁へ寄りかからせる。

「あ……ふ」

体重を後ろへ預けられるようになり、ほんの少しだけ、女体から力が抜けた。

大丈夫、この手順できっと正しい。

ペニスの焦れつたさを無視し、自分を励ましながら、いざ、愛撫の開始。

まずはなだらかな曲線の肩へ、そつと口付けてみた。

「んあっ!!」

誰かを呼び止めるためにポンと叩くより、ずつと弱い力のはずだ。

なのに、琴美は震えてしまう。壁がなければ、早々とうづくまっていたかもしれない。

「つ、続けていいですか？」

聞いてみれば、無言の頷きが。

そこで少年も、顔を埋め直して、唇の当たる先を吸ってみた。

「んやあうっ!!」

さらに大きな声が弾けた。

「先輩? あの」

「ん、続けて……っ……!!」

皆まで言わずに催促だ。一也もそれを信じることにして、吸引をだんだん強くしてみる。宙ぶらりんになつていた手は、正面の脇腹へあてがった。

「ふあっ……や、く、くすぐった……あっ!!」

柳腰がくねつても、しつこく指を張り付かせる。反対に掌は浮かせ、敢えて一段と

くすぐったがらせる触れ方へ変える。

どっちも琴美と同じく、前に見たアダルトDVDが参考資料だ。

「これ……つてつ……うやふつ!! 一也君が触るとつ……ムズムズつ、がつ……強くつ……なつちやつ……ああんっ!!」

混乱しかけの喘ぎをBGMに、唇を下降させていき。手の方も、汗ばんだ肌の微かな引っかかり具合を愛でつつ、奇妙な昆虫さながら、乳房の真下まで走らせた。膨らみの陰に溜まった汗を、人差し指で引き伸ばしていく。

粘着質の吸引と、卑猥なタッチに挟まれ、美乳はプルプル揺れていた。

喉も派手に反っており、そこから伝ってきた汗が、吸われるままに、少年へほのかなしよっぱさをもたらず。

「ふうお……っ」

「ひゃううんっ!!」

牡の本能へ働きかける味だ。煽られた一也は舌まで操りだす。

「んむっ!!」

本当は、舌のザラツキで一方的に先輩を擦り立てるつもりでいた。しかし、即座に自分まで痺れてしまう。粘膜へ吸い付き返してくる柔肌が、蠱惑的すぎたのだ。

それでも唇を胸の丸みへ這い上らせていくと、待っていたのは、顎先が容易く沈んでしまう、一層の柔らかさ。

そして最初に思った通り、精液が薄ら残って、固まりかけていた。快い舌触りではないし、苦味もあるが、琴美はこれを飲んでくれたのだ。

一也は美乳を清めるつもりで、不味い残滓をこそぎ取りにかかった。舌先は肌へめり込み続け、琴美も「やうっ!! ひううっ!」と身を竦ませる。

そして仕上げに餌食となる乳首。

いくら一也が後始末のつもりでいようと、愛撫は発情した牡の力強さを伴っている。彼は極限までしこりきつた突起を、さらに尖らせるように吸ってしまった。舌でも四方からノックして、キュッと締まった弾力を、とことん転がす。

琴美はそれにまるで抗えない。

「ひあっ!! やっ、乳首っ……パイザリの時より、もつと……あうっ!! これっ……ど、どこまでいっっちゃうのおお……っ!! あ、んひいっ!!」

何度叩かれても、乳首はすぐにバストの突端へ戻る。だが肢体全体が、壁に寄りかかったまま、あられもなく浮き沈みしだしている。そのせいで、乳頭も啜えられたまま往復し、自ら疼きを強めてしまう。

その間に、一也は手を下げていた。汗ばむ腰の細さを卑猥になぞり、太腿も両方、縁取って。

「そこっ……あんっ、も、もう……そっちまでしちゃう、の……っ!? ふあっ! あっ、やっ!? 乳首だつてっ……まだしてる途中なの、にっ……!!」

戸惑いのよがり声と共に、引き攣るしなやかな美脚。その手触りが、やたらと心地よく、もはや気配りさえ忘れてしまいそう。

しかし、だんだん息が持たなくなってくる。いつしか彼は突き出た鼻でも、乳肉をグリグリ穿っていたのだ。

「ん……ふはっ!」

耐えかねて顔を浮かせば、琴美と視線がぶつかり合った。

舌を出したままの一也は、自分でも気付かないうち、飼い主へ甘える牡犬のような顔となっていた。

対する琴美は、初めての快感と混乱がない交ぜとなって、愛くるしい顔立ちを、汗と涙と涎で濡らしている。

「う……あ……」

何かを訴えるように開かれる、美女の唇。

欲情していた一也でさえ、時間が止まりかけたように思え――。

しかし次の瞬間、琴美は思い切り、彼の頭を掻き抱いてきた。

「や、やめないでっ!」

「んぐっ!」

息継ぎもまだのうちに、顔を胸の谷間へ挟まれて、一也も何事かと慌てた。しかし、それに気付かない琴美は、泣きじゃくるような声を張り上げる。

「一也君……あたしっ、君にだったら何されてもいいからっ! やる気になってる今のうちに……っ、あたしの一番エッチな場所へも触ってみて!! あたしもっ、い、今ならきつと平気……っ!」

あまりに切迫したトーンを聞かされ、一也は戒めを振り解けなくなった。もしかしたら、途中で顔を上げたため、また気後れしかけていると勘違いされたのかもしれない。

そうじゃないんですと教えたかったが、口はほとんど動かさない。

「むぐっ、ぐ、ふうううっ!」

いよいよ酸欠に陥りかけたところで、ようやく拘束が緩み、息を出来るようになる。その間に、琴美は両手を下げて、そっちにある『何か』を左右から広げていた。

見るまでもない。琴美は人より強い羞恥心と苦手意識を抱えながら、自分で下着越しに、陰唇をクパアッと割ってみせたのだ。

「こ、こっちにも……………して、ね？」

一転して、心細そうな声音。

「つ……………はいっ！」

今すぐ、従わなければならない気がして、一也はダイブするようにしゃがみ込んだ。「ひゃっ!! お、小野寺君っ!!」

彼の思いがけない行動力に、誘った琴美も慌てたらしい。が、指は割れ目から離さない。

彼女が捕らえているのは、大陰唇のヘリだった。

そこは小さいながらも、バストを真似るかのように、ぷっくりと盛り上がっており、見るからに滑らか。しかも愛液までまぶされ、今にも指先からこぼれてしまいそう。

「う、わ……………」

彼女の股間は、少年の予想を遥かに超えて、濡れそぼっていた。間近で嗅ぐから、甘酸っぱい牝の匂いは、空気を重たく感じるほどに濃い。

しかも大陰唇は、柔らかいだけでないことを誇示するように、赤い下着の端を、谷

間にキュッと挟みかけていた。

頑張ろうと決めたはずの一也でさえ、気圧されかける存在感で。

だが、彼はその引け目を抑え、ショーツへ顔を寄せた。

「な、舐めます、先輩……っ」

まずは布地越しに一擦り。染み込んだ蜜を押し出すつもりで強く舌を当てれば、途端に琴美の姿勢が崩れた。

「ひあつ、や、はううっ!!」

指は割れ目から離れるし、腰も高さを落としてしまふ。陰唇と唇の密着は半端なく、プニツとした感触が、少年の脳天へ雪崩れ込んできた。

「ぐ、むっ!!」

女陰は瞬時に合わせ目を元の形へ戻し、舌先と下着を捕まえようとする。その見た目に違わぬ柔軟さが、後輩の心へも火を点けた。

一也は半ば顔を塞がれながら、下着を指で横へずらした。一瞬、黒々とした陰毛や、谷間の中まで、見えた気もする。

しかし詳しく確かめるより、割れ目へむしゃぶりつくことを優先した。

今度は大陰唇が真っ先に唇へ当たる。そこは女体の中で最も熱を帯び、直に圧すや、

溜まっていた愛液をグチュツとこぼした。咄嗟に掬おうとした一也の舌は、恥丘の谷に深くめり込んでしまう。

「くひいっ!! 来ひ……っ、つあっ!! き、来た……あっつ！」

「ん、ぶっ!!」

彼のせつかちな動きで、琴美も悶絶していた。迫ってきた顔を跳ね飛ばしそうなほど、下半身を押し出してくる彼女。が、そうなれば嫌でも舌を深く迎えることになる。

「んぐっ!!」「ひいんっ!!」

またも呻きの二重奏だ。

大陰唇の内側には小陰唇があった。両側から押し寄せる弾力は一層強く、淫熱も舌へグイグイ伝わってくる。纏わりつく愛液までが、沸騰寸前に思われた。

しかし一也は、小陰唇だけで止まらない。彼の切っ先がめり込んだのは、さらに奥。繊細そうな粘膜の壁の一点にある、深みというか、穴というかで。

きつと、ここが膣への入り口!

思い余った一也は、抉るようにねぶってしまった。刹那、肉穴は一度に拡張されて、さらなる先へと道が開かれる。

出来た道に少し潜るだけでも直感できた。後はもう、上下左右がことごとく、濡れ

そぼつた粘膜、性感帯の塊なのだ。もう少し先では、処女膜が待ち受けているのかも。だが、そこへ至るまでもなく、秘所は狭くて心地いい。すぼめた舌に、肉壁がキュウキュウ迫る。

「きやひ!! やっ! はっ、ひっ、何つか……あ!! すごいのっ入っちゃってるううっ!!」

琴美も両手で一也のモジャモジャ頭を押さえてきた。それは何か支えを求めたゆえだろう。しかし、一也は再度の呼吸しづらさに見舞われた。堪らず舌を波打たせ、周囲の濡れ肉を押しつけてしまう。

「んひああっ!! や、や、あはあああっ!!」

「う、くっ……ふおおっ!!」

目を睜^{みは}る少年は、すぐ前に漆黒の陰毛が生え揃っているのを見た。量は多くないようだ。愛液でしんなりと肌にくっ付いており、もしぶつかれば絵筆さながら、ヌメリを塗りたくってくるだろう。

「く、ふっ! ふぐっ、むおおっ!!」

一也は意味もなく、陰毛へ鼻の頭を擦り付けたくなくなった。その動きが、舌の角度を鋭く変えて、

「かひっ!? ああん!? ふ、深いよおっ! あたしっ、奥まで……灼けちゃうっ!!」

一也も琴美も、混乱から抜け出せないから、やること言うことメチャクチャだ。その矢先、少年の唇が、割れ目の上端と激突してしまう。

「く、ふっ!!」

そこでは何かの突起が、半分近く皮に包まれつつ、周りよりも膨らんでいた。豆粒より小さいし、目で探そうとしたら、却って見落としていたに違いない。

そんなささやかな器官なのに。

突かれた途端、琴美はブルッと震え、悲鳴すら出せなくなっていた。

「ひぎっ! ひっ、ひひううっ!!」

まるで突然の尿意に襲われでもしたように、腿をブルブル振動させる。それから喉へつかえた分を吐き出すように、浅ましい叫び声をまき散らした。

「やはああ!! そ、そこ駄目え!! 痺れすぎでっ……絶対っ、まずい場所だからああ!」

「先ば……むぐっ!!」

言葉と逆に、いよいよ隙間なく口を塞がれ、一也は驚きに頭を引つ掻き回される。

それでも乏しい知識をかき集め、自分がクリトリスにぶち当たったのだと悟った。

突起はすでに愛液で厚くコーティングされているのだ。にもかかわらず、痛烈な刺激が突き抜けたらしい。それこそ、全て受け入れたいという先輩の健気な意欲すら瞬時にへし折りがかねないほどの絶大すぎる愉悅が――。

そこで一也はひとまず陰核を避け、秘洞だけをねぶることにした。

未だ稚拙な舌遣いではあるが、すでに女体が出来上がっている上、クリトリスのシヨックから立ち直る暇もないままの追撃だ。琴美には充分効いている。

「かず……君……やうううっ!! なん、でっ……あたしの中っ、さつきより強く痺れちやうのお!!」

女体は竦み、両脚も寄り、危険な舌を自ら陰唇内に押し込んでしまう。

愛液も、少年の口周りとヴァギナを無差別に濡らし、一部はすでに顎までこぼれていた。舌を使う程度では取りきれない。

こそばゆくなった一也は、唇を吸盤のように秘所へ張り付かせた。そして一気にバキュームだ。

ズルズルズルツ、ズヂュウウウツ!

これまでと比較にならない下品な音で、琴美を羞恥によっても翹ってしまふ。

「ひううつ!? やはううつ!? か、一也くううつ! やだつ、ああんつ! 吸つてもつ、君が吸つてもおつ、ムズムズつ、なくならないのおおつ!」

まさか、キスで本当に疼きが抜けると思つていた訳ではないだろうが——いや、性に疎い先輩だから、それを期待していたのかもしれない。

そんな考えが頭をかすめたものの、一也はやめられなかった。

思考がぼやけて、もはや何が正解か分からない。ブレーキも利かず、ただひたすら美人女子大生の括れ腰を追いかけてしまう。

吸れば口内にしよっぱい液体が溜まり、彼はそれをまとめて飲み下した。

「ん、ぐっ!」

一回ではとても足りない。さらなるヌメリを掻き出したくて、少年は舌を突っ込ませては引っ込め、突っ込ませては引っ込める。

さながら小さいペニスの抽送だった。

琴美の方も、愛液どころか、危うい喘ぎが止め処ない。入り口付近の膣壁は、愛撫を歓迎するように脈打ちだしている。

その蠢動と舌への摩擦に誘われ、一也は両手で鼻先の腰を捕まえた。頭を横へ振りとくり、往復ビンタさながらの動きで、膣口を左右へ割りまくる。愛液もビチャビチ

ヤ飛び散らせる。

責める側と責められる側、双方の人間性をそぎ落とす狂おしい舌遣いだ。性感を力
ずくで開発されていき、初心な琴美もとうとう陥落してしまう。

「ひあつ！ あ、あひいん!! これって変じゃないのっ!! 恥ずかしいのにつ、訳
が分からないのにいい！ ひきつ、もう駄目ええっ！ 一也君つ、ほんとに……や、
やめないでえ!! やめられたらっ……そっちの方がおかしくなっちゃうからああ
ん！」

すでに己を見失いかけていた一也だが、この嬌声で気持ちりが完璧に固まった。

先輩はちゃんと悦んでくれている！

一也は先輩の腰を拘束したまま、改めて顔を中心に据えた。今度は頷くやり方だ。
変じやないですと行動で教えてつ、上下に変更させたうねりで、水浸しの秘所をほじ
くり返す。

「ひああつ!! 当たる……く、ああんっ！ またっ、当たっちゃってるのおおっ！
ひおっ！ ひいおお!!」

琴美が言うのは、きつとクリトリスだろう。責めは時折、否、連続して陰核までか
すめ始めているのだ。

だが快感を認めてしまった琴美は、もう拒めない。泣き叫びながら、自分で下半身を前後させる。まるで漏らしかけの小水を、早く出しきつてしまおうとするような、ハレンチそのものの動作。

下半身の振れ幅は大きくなる一方で、飛び跳ねるような不規則さまで混じりだした。加えて、一段と切羽詰まった質問までも。

「一也くうんっ、あああたしの身体あつ、ほ、本当におかしくないのおっ!! だって来ちゃってるの! すごいのがっ……爆発しちゃいそうなおお! やはおおおう!! やだっ、やだやだああつ! これじゃっ……もうすぐ駄目になっちゃうううっ!!」

「っ!」
多分、琴美はオルガスムスへ向かってスタートを切っているのだ。性的なものを敬遠してきた彼女にとって、絶頂感など脅威そのものだろう。何が起こっているか、理解すら出来ないらしい。

ここで止めたら、焦らしの生き地獄。ただし責めてもイキ地獄。

一也が選んだのは、秘洞をねぶり続ける方だった。愛しい人を自分のクンニでイカせられるなんて、童貞少年にとっては、おおげさではなく夢みたい。

彼は秘洞を広げるだけでなく、クリトリスへも積極的に舌をぶつけ、汗みずくの女

体を追い詰めた。一回急所を弾かれるたびに、琴美はつま先立ちで痙攣した。

「ひやおつ、ひ、ひはあああ!! そこがっ、やつぱりそこがっ、一番きついのおおつ! やっ、駄目につ、もうっ、駄目にな……あがっ……うはひいひいっ!!」

後一押しだ。

とうとう一也は、手コキとパイズリ、二回分のお礼をまとめてする勢いで、顔面を琴美に押し付けた。荒ぶる舌もねじ込んだ。

——先輩、イッてくださいっ!

想いたっぷりの猛攻は、上下左右の区別がなかった。迫る肉壁を滅多打つ。陰核を鼻先で弾き、愛液も吸い、前後の抜き差しまで激化。

それらがついに琴美を、未知のエクスタシーへ叩き上げた。

「ひっ……!! いひいっ!!」

後ろは壁だというのに、大きくのけ反る彼女。

「んあつ、は、はひっ、ひおつ、ひ、おほっ!? んうううくひいひはっああああやあああああつ!」

大事な場所を玩弄されて、壊れたように身震いし、股間だけはめいっばい少年へ突き出してた。

「ふ、おとおおおお!!」

一也が秘所と触れ合わせているのは、口だけだ。なのに、彼はトランクスの中の怒張を、琴美へ突き立てている錯覚に襲われた。

「う……………あ……………あつ……………」

それほど凄いい、処女のままの、琴美の昇天だった。

一也が舌を引き抜くと、琴美は背中をズルズルと壁に擦り付けながら、座り込んでしまった。

「はあつはあつ……………はあつ、はあつ……………はつ……………は……………つ……………はああつ……………」

虚ろに天井を見上げ、未だ肉悦から抜け出せないように、息を乱し続ける。脚もしどけなく開き、ショーツは限界まで愛液を吸っていた。汗だくの巨乳を隠すゆとりすらないらしい。

息絶え絶えのその姿は、合意の上でというよりも、凌辱されてしまった後のよう。

なのに琴美は、思い出したように視線を後輩へ向けると、瞳の焦点が合わないまま、開いたままの口の端を上げた。

「一也君……………約束を守ってくれて……………特別扱い無しに、最後までしてくれて……………あり

がとね……………?」

「え……………」

「終わりのアレ……………イ、イクってこと……………なのよね……………? ん、ふ……………つ……………すごか

ったあ……………」

「……………」

一也は途中から、約束を守るなんて殊勝な心構えではなくなっていたかもしれない。しかし後ろめたさがあっても、ここでヘタレたら元の木阿弥だ。

気持ちですつきりさせるため、彼は立ち上がり、顔の幅だけ小屋の窓を開けてみた。さつきは思いつかなかった手だが、秋の澄んだ風を、肺へいっぱいに取り入れていけば、男根も次第に鎮まってくるだろう。

後一時間かそこらで日も沈む。

「先輩……………いえ、琴美さんっ。僕、明日から頑張りますから!」

「うん。頼りにしてるね、一也君」

窓際で振り返って意気込む恋人兼後輩に、琴美は優しく目を細めてくれた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>